

# 現代的コミュニケーションにおける道徳的価値の整合性に関する一考察

——中学校道徳読み物資料「言葉の向こうに」の事例を通して——

One consideration on the consistency of the moral value in the modern communication

——Let the example of middle school morality books-and-magazines data “KOTOBA NO MUKOUNI” pass——

鈴木 晴 久

Haruhisa SUZUKI

(和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター特別研究員)

佐藤 史 人

Fumito SATO

(和歌山大学教育学部)

2013年10月4日受理

## Abstract

On an aim of the moral education and the consistency of the document, I study it in subject in “KOTOBA NO MUKOUNI” in “the collection of junior high school morality reading documents” that Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology published in 2012 and analyze it. As for this document, a trouble at the time of the Internet use is taken up, and the development is written in line with a fact, but the solution of problem peculiar to the Internet is often assumed all the more an aim. This study is intended that I consider points to keep in mind on treating a morality document in what I analyze whether the compatibility as the morality teaching materials which this document has an aim and the consistency of “the development example”.

### はじめに

道徳教育は、1958年の教育課程の改訂において、小中学校の教育課程の一領域として「道徳の時間」が特設されて以来、小・中学校の学習指導要領の改訂毎に、その充実が述べられており、また、それを受けて、1983年に道徳教育の実施状況についての全国調査、1987年の学校道徳教育振興事業の実施など、様々な取組が行われている。1989年の学習指導要領改訂時には、教員のための指導資料として「道徳教育推進資料(指導の手引きとビデオ資料)」を作成、配布している。

しかしながら、いじめ・自殺問題、青少年犯罪の凶悪化等、青少年を取り巻く課題についての指摘や関心はいまだに続いており、さらに、近年では、掲示板\*1やSNS\*2、学校裏サイト\*3といった情報ネットワーク上のコミュニケーションに関するトラブルといった新しい課題も指摘されている。

こうした状況下において、教育基本法改正(2006.12.22法律第120号)により、教育の目標の中に、新たに「豊かな情操と道徳心を培う」ことが明記された。また、2008年1月の中央教育審議会答申\*4では、子どもたちの生命尊重の心や自尊感情が乏しいこと、規範意識の低下、人間関係を築く力や集団生活を通じた社会性が十分に育成されていないこと等が指摘され、道徳教育の充実・改善が必要であるとされている。

これを踏まえて、2008年度の中学校学習指導要領の改訂では、道徳教育の充実により豊かな心を育成する

ことを基本的なねらいの一つとしており、また、『中学校学習指導要領解説 道徳編』では、生徒の自然な道徳性の発達を阻害している現象に対処する必要があると指摘し、「社会全体のモラルの低下への対処」や「社会の変化に伴う様々な課題への対処」等を特に考慮しなければならない事柄としてあげている。

文部科学省では、今回の学習指導要領の改訂を踏まえ、新たに小学校と中学校向けに「道徳読み物資料集」(2012.3)を刊行し、新設された内容項目や指導内容の重点項目及び情報モラルなどに関する読み物資料集とその活用例を提供している。

本研究は、この資料集のうち、『中学校道徳読み物資料集』(以下、『中学校道徳資料集』)に(6)として収録されている「言葉の向こうに」について、ここで取り上げられている現代的コミュニケーションとねらいの整合性を分析することを通して、ここでの道徳的価値を解明することを目的としている。

### 1. この教材における「ねらい」について (1)道徳の主題(内容項目)としてのねらい

『中学校道徳資料集』巻末のこの資料の活用例では、「ねらい」を「それぞれの立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもとうとする道徳的判断力を育てる」としている。

さらに、活用例の最後にある「指導上の留意点と工夫」が、「インターネット使用上のエチケット指導をね

らいとするのではなく、道徳の主題(内容項目)をきちんと押さえる」としていることから、この資料の「ねらい」が学習指導要領の「道徳の内容」の学年段階・学校段階の「2 主として他の人とのかかわりに関すること」の中学校段階の特に「(5)それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ」を踏まえたものになっていることが分かる。<sup>5)</sup>

この項目は、1958年の「中学校学習指導要領」設置以来、表現や形式等は改正されているが、その内容は道徳の項目として組み込まれ続けている。

『中学校学習指導要領解説 道徳編』(2008. 9)では、「互いのもつ異なる個性を見つけ、違うものを違ふと認め、ときには許す私心のない寛容の心」を育てることが求められ、また「個性は他と異なる」ため、「他に対して謙虚に学んでいく」ことが大切であるとしている。

徳山正人・奥田真丈編『学習指導要領用語辞典』(ぎょうせい: 1971)においても、中学校における寛容の指導について、「ひとり異なる考えや立場を重んずるといふにとどまらず、これらに聞いて、みずから高める心がまえが求められている」として、寛容の指導が「謙虚であることの指導と表裏をなして進められることが期待されて」いると述べている。

また、『学習指導要領用語辞典』では、寛容を「ひとを許しえるためには、その前提に、みずからまた許されるべきことの多きを、それ相応に自覚するところがなければならない。自分とは異なった主義主張や行動を受け入れて、なおかつ無節操に陥らないためには、みずからしかるべきたのむところがなければならない。」として、それが「社会生活を営むうえでの対人態度の基本」であるとも述べている。

つまり、他人とのかかわりに当たっては、自他の個性や価値観を認めた上で「寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ」ことが必要であり、安易な同調や迎合でない本当の信頼関係を築くためにも、この二つを切り離して考えることは出来ない。

この資料の「ねらい」には「謙虚」が省略されているが、これまで述べてきたように「謙虚」を切り離しては考えられないので、「寛容の心をもとうとする道徳的判断力」を育てるというところに「謙虚」も含められていると考える。

## (2)資料の特質を生かした「ねらい」

「活用例」の「二 資料の特質」の「(1)資料の生かし方」には、「主人公が置かれたような状況は、ネット社会にアクセスしていれば誰もが経験するような出来事である。自分の発する言葉の先に、それを受け取る「顔をもった他者」がいると想像することで、ネット社会におけるよりよいコミュニケーションのために

はどうすべきかを考えさせたい。」とある。

『学習指導要領解説 道徳編』では「3 生徒を取り巻く社会の変化と道徳教育」の「(4)社会の変化に伴う様々な課題への対処」の中で、「また、インターネットや携帯電話等を通じたコミュニケーションが更に進む一方で、その影の部分への対応も課題となっている。」としている。その例として、ネット上の書き込みのすれ違いなど他者への思いやりや礼儀の問題及び友人関係の問題、情報を生かすときの法やまじりの遵守に伴う問題などが挙げられている。また、こうした事例を使った指導を通して、その問題の根底にある他者への共感や思いやり、法やまじりのもつ意味などについて生徒が考えを深めることができるように働き掛けることが重要になるとしている。

しかしながら、ネット上の書き込みのすれ違い等は、ITの発達によって顕在化した今までになかった未知の問題であり、また、情報社会における知識や技術については、教員を含む成人にとって経験知を伴うものではなく、児童生徒のそれと差はなく、ともすると児童生徒の方が新しい状況に柔軟に対応する場合も多い。

従来の「こころのすれ違い」に対処するような他者への思いやり等によって解決に導ける問題なのかどうかは慎重に考えなければならない。

## 2. 「言葉の向こうに」の概要と内容

この作品は、ヨーロッパのサッカーチームのA選手のファンサイト\*<sup>6)</sup>に寄せられたA選手に対する批判的な書き込みに対して主人公加奈子が応酬するという設定になっている。

以下に要約する。

- ①夜中に目が覚めて、A選手が所属するチームの試合結果が分かるサイトを見る。
- ②チームは勝ち、A選手がゴールを決めていたので日本のファンサイトにアクセスし、「おめでとう」と書き込む。
- ③次々と関係のサイトを見て、気がつく朝になっている。
- ④次の日、帰宅するとすぐにサイトにアクセスする。
- ⑤ファンサイトにA選手を非難する書き込みが書かれていたので怒りを感じる。
- ⑥怒りにまかせて反論を書き込む。
- ⑦次々に反応があり、激しい応酬になる。
- ⑧気づかないうちに1時間たっており、母親の食事の催促によって中断する。
- ⑨食事の後、再びサイトにアクセスする。
- ⑩仲間であるはずのA選手のファンから対応を非難され、ショックを受ける。
- ⑪「あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべて」という書き込みを見て、コミュニケーションを忘れていたことに気付く。

⑫母の呼びかけに明るく答える。

### 3. 「活用例」のねらいと「言葉の向こうに」の整合性

この教材には展開例として3つの場面が挙げられているが、これを中心に2で設定した場面の番号①～⑫の順に見ていく。

#### ①～④について

この資料の導入の部分である。『青少年が利用する学校非公式サイト(匿名掲示板)等に関する調査について』\*7によると、学校の授業以外で、インターネットやメールを利用している中高生は90.2パーセントと約9割を占めており、用途別にみると、「学校の友達とメールを交換する」が80.0パーセント、「学校外の友達とメールを交換する」が61.6パーセント、「ブログ\*\*8やプロフィール\*9を見る」が47.8パーセントで、「ブログやプロフィールを作る」も26.8パーセントとなっている。

こうしたことから、インターネット上のサイトを利用して、情報を得ることや情報を交換すること自体は中学生にとっても違和感はなく、現実的な設定になっている。

#### ⑤について

A選手を非難する書き込みを見てみると、「Aは最低の選手。あのゴール前はファールだよ、ずるいやつ」「人気があるから優遇されているんだろ。たいして才能がないのにスター気取りだからな。」となっている。

この相手の書き込みは、その一つ一つには何の根拠もないし、論理性もない。また、それぞれの非難につながりもない。A選手に対する非難を羅列しているだけである。A選手のファンである加奈子が怒りを感じるのは当然である。

#### ⑥について

直前に「ファンサイトに悪口を書くなんて。」とあるように、このサイトはA選手のファン仲間の交流を目的としている。そこにA選手の非難を書き込むのは挑発行為である。加奈子の怒りは、非難自体に対する怒りと、ファンの集まるサイトに非難を書き込むという挑発行為に対する怒りもある。

最初の展開例として

○必死で反論する私の言葉がだんだんエスカレートするのはなぜだろう。

- ・ファンとしてA選手の悪口を言われっぱなしにできないから。
- ・ファンサイトに悪口を書くのは許せないから。
- ・売り言葉に買い言葉で、相手が見えない匿名だから書きやすい。

が挙げられているが、この回答例の最初の二つはそのことを表している。

非難の書き込みに対して、加奈子は「負け惜しみなんて最低。悔しかったら、そっちもゴールを決めたら。」と返しているが、非難の書き込みの内容はA自身に対

する評価だけであり、非難の書き込みをしている相手が、負けたチームのファンであるとか、A選手のライバルのファンであるとかは一切書かれていない。それなのに、「負け惜しみ」とか「悔しかったら、そっちもゴールを決めたら。」と返してもかみ合うことはない。加奈子も相手のことが見えていないのである。

#### ⑦について

さらに、「向こうの新聞にもAのプレイが荒いって、批判が出てる。お前、英語読めないだろ。」「Aのファンなんて、サッカー知らないやつばかり。ゴールシーンしか見てないんだな。」「Aは、わがまま振りがチームメートからも嫌われてるんだよ。」と返ってくる。A選手の非難にとどまらず、A選手のファンに対する非難までエスカレートしているが、これも非難の範囲や観点が広がっただけで、それぞれは相変わらず何の根拠も論理もない非難の羅列である。

加奈子の返信については何も書かれていないが、「必死で反論する私の言葉も、だんだんエスカレートしていく。」とある。相手の非難に対して、論理的に返すことは不可能であり、「負けられない」という思いだけで、相手と同じような非難の羅列を繰り返していることは容易に想像できる。

#### ⑧、⑨について

母親の食事の催促によってネット上のやりとりを中断する。これがなければエスカレートした状態が際限なく続くことを想像させる。また、ここでの母親とのやりとりは、「目を見れば分かる」や「つられて私も笑った」など、ネット上のやりとりでは表せない感情や表情といった言葉以外にも伝わるものがあることを示唆している。

#### ⑩について

ネットで言い争った次の日にファンサイトに加奈子と同じA選手のファンから「中傷を無視できない人はここに来ないで」という書き込みがあり、加奈子が反論すると、加奈子の書き込みによって「A選手のファンはそういう感情的な人たちだ」と思われてしまうと書き込まれている。その後に展開例にある「中傷する人たちと同じレベルで争わないで」と続いている。

○「中傷する人たちと同じレベルで争わないで。」という書き込みを見て、私はどんなことを思っているだろう。

- ・悪いのは悪口を書いてくる方だ。
- ・負けてたまるか。
- ・私は悪くない。

「中傷」とは「ありもしないことをわざと言いたてて、他人の名誉を傷つけること」であり、A選手を非難する書き込みはまさにこれである。

中傷を書き込んだ相手は議論しようという意図の下に書き込みを行ったのではなく、相手を挑発し傷つけようとしているだけであり、こうした論理性を欠く書



き込みに対して、論理的に返しようがなく、それでも「負けられない」という感情に任せて反論すると、相手と同じような論理性を欠く中傷の羅列を返すだけになり、中傷合戦が延々と続くことになる。「中傷する人たちと同じレベルで争わないで」はそういう状態に陥った加奈子に対する忠告であり、最後に「中傷し合ったらきりがないよ」と書き込んでいるのはこういう状態になることを示唆している。展開例の回答はどれも⑤～⑦までの加奈子がいかに冷静さを忘れ、興奮した状態であったかを表すものになっている。

#### ⑩について

仲間だと思っていた人たちから思いがけず非難された加奈子は「突然真っ暗な世界に一人突き落とされたみたい」に感じるが、「ネットのコミュニケーションって難しいよな」という仲裁的な書き込みと「あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて。」という書き込みを見て、コミュニケーションをする上で一番大事なことを忘れていたと思う。

ここでの展開例は次のようになっている。◎が付けられていることから、この資料の重点にする意図があると考えられる。

◎画面から目を離して椅子の背にもたれた私は、どんなことを考えていただろう。

- ・読む人の気持ちを全く考えていなかった。
- ・ネットのコミュニケーションって難しい。
- ・直接会って話しているときよりも神経を使わなくてはならないのだ。
- ・ネットって言葉じりにこだわって、ゆとりをもって受け止められない。
- ・自分の言いたいことばかりになって相手のことをじっくり考えない。

ここでの展開例は非難の書き込みをした人とのやりとりではなく、後半の仲間とのやりとりに当てはめて考えなければならない。

⑩についてで示したように、中傷の書き込みをした人たちと加奈子とのやりとりを客観的に見れば、相手の書き込みが中傷である時点でこのやりとりが不毛であることは明らかであり、だから多くの仲間たちはこれに加わっていない。「あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて」は、このことを伝える言葉である。回答例の「読む人の気持ちを全く考えていなかった」は、このことを理解した上での回答として引き出す必要がある。⑩の仲間たちからの非難も、非難ではなくこのことを伝えようとしていたのであるが、加奈子の感情的な反論によってつい厳しい表現になってしまっている。仲裁者の「まあみんな、そんなきつい言い方するなよ。」は、非難の書き込みをした人たちと加奈子のやりとりではなく、仲間内でのやりとりに向けられたものである。敵対する者同士ではなく、仲間内であってもこうして厳しい言い方にな

ってしまう可能性があるところにインターネット上のやりとりの怖さがある。回答例の「ネットって言葉じりにこだわって、ゆとりをもって受け止められない」や「直接会って話している時より神経を使わなくてはならないのだ」はこのことを踏まえた指導である。

加奈子は、こうした論争が不毛であり、仲間からの書き込みが、それに気付かない自分を気遣っての忠告であることを理解して椅子の背にもたれるのである。「何で字面だけにとらわれていたんだろう。」はそれを表している。

こうした展開を経た上で「一番大事なものを忘れていた」や「すごいこと発見しちゃった。」の意味を考えさせることで、この活用例の「ねらい」は達成されるものとする。

#### 4. インターネット上のコミュニケーションの特性

ここまで述べてきたように、この資料の活用例のねらいを達成するために必要なのは後半の仲間たちとのやりとりの部分であり、前半の非難の書き込みの部分ではない。

ただし、「資料の特質」にある「ネット社会におけるよりよいコミュニケーションのためにはどうすべきかを考えさせたい。」については、前半の部分についても考える必要がある。

前半で書き込まれたのは誹謗中傷であり、根拠も論理もないのだから、それぞれの書き込みは意見といえるレベルではないし、このネット上のやりとりも議論として成り立たない。ここで必要なのは、この段階では何をやっても意味がないということ、また、人を中傷すること自体がしてはいけないことであり、中傷に巻き込まれた時に同じ舞台に乗ってはいけないということに気付かせることである。

「言葉の向こうに」をインターネット上のやりとりにしないで、例えば教室でのやりとりに替えると、これが誹謗中傷であることは直ぐに分かる。生徒たちにとっても同じであると思われる。

しかしながら、これがインターネット上のやりとりになると、ひどい状況が起こることがある。「ネットのコミュニケーションって難しい」と言われる所以である。

原因の一つは、インターネット上での文章がその内容以外が取り払われてしまうことにある。公式の文章も落書きも、同じような書体、同じようなスタイルで表されるし、「いつ、どこで、誰が、どういう立場で、何のために、どの程度のレベルで」といったことが捉えにくい場合が多い。例えば、この資料のA選手に対する最初の書き込みである「Aは最低の選手。あのゴール前はファウルだよ、ずるいやつ」にしても、文面通り捉えれば、A選手に対する非難だが、それがどの程度の非難であるのか、軽い揶揄なのか、激しい怒り

なのかは分からないし、極端に考えるとA選手のファンであり、すばらしいゴールに対する賞賛をひねった形で称えたものである可能性もある。「ずるいやつ」にしても、「狡知に長けた」というニュアンスであることも考えられるのである。

しかし、加奈子がこれをA選手に対する非難と捉え、反論したために、A選手を非難したい人たちだけでなく、ネット上でのトラブルを期待している人たちがそういう人たちであることが分からないまま書き込んでくる。それぞれがそれぞれの立場で中傷したり、かき回したりするのであるから、お互いにつながりはなく、議論が発展するはずもない。インターネットの特徴を「オープンで公平なネットワーク」というとらえ方がある<sup>\*10</sup>が、これは悪意をもったものを排除したり、コントロールしたりすることが出来ないということでもある。

匿名性の問題もある。いわゆる当事者とは関係ない人が出てきて、お互いがお互いを知らないまま議論の法則を踏まえることもなくやりとりをするだけでなく、時には一人で何役にもなりすまし、議論をおおこともできる。

この教材は、こうしたインターネットの特性を考えさせるのにも適した教材である。書き込みのやりとりで感じさせる「ずれ」はこの特性を考えさせることを意識した上で故意にずらしたとも考えられる。

従って、前半部分からこうしたインターネットの特性を考えさせ、それを踏まえた上で、後半部分からインターネット上におけるコミュニケーションのよりよいあり方について考えさせれば、この教材と活用例の「ねらい」は達成されると考える。

## 5. 「言葉の向こうに」に対する考察と発展的活用例

宇佐見寛<sup>\*11</sup>は「人間は社会的事実の中に生き」ており、社会的事実について十分に知らなければ、言動の仕方、生き方を考えることが出来ないと述べているが、道徳の授業においても、考えるための材料、現実の認識を十分に与えなければならない。そういった意味で教材「言葉の向こうに」はインターネット上のやりとりという、現在の中学生が直面している新しい問題を取り上げており、また、話の進行も事実に近い展開になっている。

この資料の前半は、不条理な状況に出会った時、それが不条理であることを見抜き、どのように対処するかといったものであり、たまたま設定がインターネットを使った他人とのやりとりというだけで、取り扱うべき題材は、インターネット上の問題でも、いろいろなもの見方や考え方があることを理解することでもなく、もっと原始的な問題である。

意見とは「ある問題についての考え」であり、一定の論理の下に組み立てる必要がある。また、議論とは、

「互いに、自己の意見を述べ、論じ合うこと」であり、論理の展開を通して行うものである。

そういう観点から見ると、この資料は非常に適切な教材になり得る可能性を持っている。「中傷する人たちと同じレベルで争わないで」や「挑発に乗っちゃダメ。一緒に中傷し合ったらきりがないよ」という書き込みを中心に、「中傷」とはどういうことか、なぜ「中傷し合うことにきりがないのか」について、例えばグループで討論するなどして、答えを導き出したい。

前半をそういう形でおさえられれば、後半は活用例の「ねらい」を考えさせるの適した材料になることは4で述べたとおりである。

従って、指導の展開としては、前半部分で、活用例の「ねらい」が空論で意味をなさない場合があることを伝え、後半部分で、だからこそ、ますますこのことが重要であることを気付かせるのが最も効果的であると考える。

この『道徳読み物資料集』全体にいえることだが、内容がコンパクトに表現されており、活用例にしても非常に簡素である。これは、この教材を扱う際には、学年や学校全体でよく吟味しなければならないという作成者の意図があるのかもしれない。また、インターネット上でのコミュニケーションを題材にしているため、それが全体の「ねらい」をさらに見えにくくしているという点もある。

安易に解釈して、例えば、非難の書き込みをした人に対して「いろいろなもの見方や考え方があることを理解」させようとする生徒の共感は得られないだろうし、まして「それぞれの立場を尊重」させることなどは論外である。

こうしたことから、この資料を使う際には、そのねらいと展開について、特に前半と後半の構造について十分検討し、熟知した上で指導する必要がある。

## 6. 終わりに

インターネット上の問題は人間にとって今まで未知だった領域のものであると同時に指導する側よりも生徒たちの方が、情報技術や知識の点で長けている可能性が高く、教員側の経験知がともすれば役に立たない分野でもある。

そうした不安がこの問題を扱う際に影響し、インターネット上の問題はそのまま情報モラルの問題であると考えてしまう傾向が強いが、この資料の「活用例」の「指導上の留意点と工夫」では、「いわゆるインターネット使用上のエチケット指導をねらいとするのではなく、道徳の主題(内容項目)をきちんと押さえる」としているように、インターネット上の問題ではあっても、その根底には学習指導要領でいうところの「主として他の人とのかわりに関すること」に書かれている内容が関わっている。

クーリー(C.H.Cooley)<sup>\*12</sup>は、コミュニケーションを「人間関係が成立し、発展するためのメカニズム」であると述べているが、このことは現代的コミュニケーションがいかに発達しても変わらない根源的なものである。

学習指導要領でいう道徳の内容項目はこうした普遍性を備えており、時代や状況の変化に左右されるものではないため、このことを踏まえ、資料の道徳的価値や、ねらいと題材の整合性を十分吟味し、把握した上で道徳の授業に取り組んでいくことが必要である。

#### 注

- \* 1 電子掲示板。参加者が自由に文章などを投稿し、書き込みを連ねていくことでコミュニケーションできるインターネット上のページ。
- \* 2 Social Network Serviceの略。日記やメッセージなどを通じて友人や知人・共通の趣味を持つ人達との交流を目的としたサービスの総称。
- \* 3 特定の学校に関する情報を交換するために設置された掲示板。
- \* 4 2008.1.17「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
- \* 5 「道徳の内容」の「2 主として他の人とのかかわりに関すること」の中学校段階の項目。
  - (1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
  - (2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いや

りの心をもつ。

- (3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友をもち、互いに励まし合い、高め合う。
- (4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
- (5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ。
- (6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
- \* 6 英語では「敷地」「用地」という意味であるが、ここではインターネット上で特定のサー情報を供給するサーバーのこと、webサイト。
- \* 7 文部科学省が2008年4月に出した報告書。ウェブ調査から絞り込んだ地域(群馬県、兵庫県、静岡県)より、学校を抽出し、中学生、高校生を対象に行っている。調査対象数は2418人で回収結果は1522人(62.9%)
- \* 8 個人やグループで運営されるWebサイト。
- \* 9 自己のプロフィールを紹介するWebサイト。
- \* 10 小檜山賢二『ケータイ進化論』(NTT出版 2005.6)p120
- \* 11 千葉大学名誉教授・教育学博士 著書に『「道徳」授業に何が出来るか』、『宇佐見寛・問題意識集』等がある。
- \* 12 アメリカの社会学者。『鏡に映る自我』等の著書がある

#### 【参考】

「言葉の向こうに」掲載ホームページ

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2013/01/24/1318784\\_7.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2013/01/24/1318784_7.pdf)